

## チベットにおける宗教儀礼

### 寺 西 知 行

チベットでは古来さまざまな神や悪魔が信じられてきた。

それらは天、地、天と地との中間、あるいは人間の体内に宿るとされ、人びとの日常生活や将来に種々の影響を与えるものと考えられた。それ故、チベットの人びとはそれら神や悪魔たちを畏敬し、諸種の宗教儀礼を発達させてきたのである。

チベットに仏教がもたらされる以前、すなわち七世紀以前から、そうした宗教儀礼——祈禱や占い——を専門に行うシヤーマンが存在したとみられ、彼らを一括してボン教徒と呼ぶこともある。後世の文献では彼らを単にシエン (gshen; シヤーマン) と呼んだり、ボン・シエン (Bon shen; ボン・シャーマン) と呼んだりもしている。もとよりボン教が宗教としての体裁を整えはじめたのは、仏教導入後、すなわちその影響を受けて後である。これは仏教教義や儀礼に対抗するための必然的帰結であろう。

こうした仏教の影響下にありながら、ボン教はなお独自の

チベットにおける宗教儀礼 (寺 西)

伝統の痕跡をとどめている。その一つにスレッドクロス (mdos) を用いる儀礼がある。

スレッドクロスの起源については正確には知る由もないが、ある仏教系の文献では、八世紀に入蔵した密教僧パドマサンバヴァが、Pho mdos, Mo mdos, Pho mo gnyis med kyi mdos の三種のスレッドクロスを伝えた<sup>1)</sup>と述べられている。

一方、ボン教の神話によれば、開祖シエンラプミボが天上から降臨したときに黑白二種のスレッドクロスをもたらしただとする。いずれも自己に起源ありと主張しているのはあるが、私見によれば、諸儀礼中に占めるスレッドクロス儀礼の重要度などからして、その起源はボン教(少なくともチベット固有の民間信仰)側にあると思われる。いずれにせよ、スレッドクロスを用いる儀礼はボン教でも仏教でも行われており、そのため、リンチェンテルズなどの蔵外文献にも、またボン教文献中にも、スレッドクロスに関する儀軌が含まれている。(『東洋文庫刊』『リンチェンテルズ目録』『ボン教文献解題』参

(照)

さて、スレッドクロスは神や悪魔などを招請するために用いられるのであるが、その作りの中心をなすものはナムカ(Nam mkha' もしくは Nam mkha' mthson) と呼ばれる部分で、本来これをスレッドクロスと訳すべきである。(しかし、mdos と Nam mkha' は厳密に区別されていないことが多い。)

ナムカの基本形状は十文字に組んだ棒に色とりどりの糸をクモの巣状に張ったもので、その中に神あるいは悪魔を呼び寄せるのである。ナムカのシンボルの意味は不詳であるが、その名称「ナムカ」は「天」もしくは「空」の意味であるから、このことと糸の配色が虹を思わせる点とを考えあわせると、あるいは天空のシンボルかと思われる。先に述べたとおり、チベットの人びとは天空に神や悪魔の存在を認めているし、また人間の靈魂が天に昇ると信じられてもいるから、ナムカが天空のシンボルだったとしても不思議はない。しかし、ナムカの形状とその中に神や悪魔を招来する(すなわち捕える)点からすると、クモの巣の象徴だとも考えられるのである。

チベットの伝承に、神や悪魔は獣や昆虫の姿を借りてこの世に出現するものがある点や、M. Brauen 氏のラダックにおける新年の祭りに関する報告からして、そのシンボルの意味として「クモの巣」の方が妥当であると思われる。

Brauen 氏の報告は大略次のとおりである。

〈新年の祭りに際し、二本のスレッドクロスを用意する。その一本には神を招じ、他の一本には悪魔を捕える。儀式終了後、神の宿るスレッドクロスは持ち帰ってお守りとし、悪魔を捕えたスレッドクロスは焼き捨てる。〉

すなわち、それぞれのスレッドクロスの中に神あるいは悪魔が封じ込められているとみなされているわけである。この考え方はある種のお守りにも反映されている。呪文や経文の書かれた紙を折りたたみ、それにスレッドクロスとほぼ同様の図柄でカラフルな糸を巻きつけて、お守りが完成するのである。これなど明らかに神をその中に封じ込めていることを意味していよう。

さて、ドゥー(mDos)はナムカを取り付けたものであるが、これには儀式の目的、すなわち対象とする神や悪魔にしたがって、さまざまな仕様のものがある。それらのいくつかを以下に列挙しておく。

(1) ラ・ドゥー (lHa mDos)

神 (lHa) を招請するためのもので、ナムカの外縁部は虹色、中心部は白色。白い鳥の羽根を付ける。白が lHa のシンボル・カラーである。

(2) デュ・ドゥー (bDud mDos)

悪魔 (bDud) を捕えるためのもので、ナムカの外縁部は虹

色、中心部は黒色。カラスの羽根を付ける。黒が *buud* のシンボル・カラーである。

(3) ル・ドゥー (*Klu ndos*)

水を司る竜 (*Klu*) —— 主として悪 —— を捕えるためのもので、ナムカの外縁部は虹色、中心部は青緑色。鳥の羽根は不特定。青緑色がシンボル・カラー。

(4) ニエン・ドゥー (*gnyan ndos*)

山の神 *gnan* —— 主として悪。祖霊とも考えられる —— を捕えるためのもので、ナムカの外縁部は虹色、中心部は黄色。黄色の鳥の羽根を付ける。黄色がシンボル・カラー。

(5) サダク・ドゥー (*Sa bdag ndos*)

土地の神 *Sa bdag* —— 主として悪 —— を捕えるためのもので、ナムカの外縁部は虹色、中心部は金色。鳥の羽根は不特定。金色がシンボル・カラー。

右のほかにもさまざまなものがあるが、いずれにせよ、儀式の目的に応じて神あるいは悪魔が選ばれ、その神や悪魔に応じてスロッドクロスが製作されるのである。また儀式に際してはテキスト(多くの神や悪魔の名が列挙されている)が読みあげられ、香・花・穀物・水・ドラムなどの楽器・武器・鳥獣の血や肉・酒など多くの供物が用いられるのが普通である。

最後に、儀式次第の概要 —— 仏教の影響を受けていること

チベットにおける宗教儀礼(寺 西)

をお断りしておく —— を記しておきたい。

(I) 六種の印を結び、六種のマントラを三回もしくは七回唱えて、スレッドクロスに力を吹き込む。

(II) ドラムを打ち鳴らし、楽器をかなで、再びマントラを唱える。また、テキストを誦誦する。

(III) 目ざす神もしくは悪魔を招請する。

(IV) 御神酒 (*Ser skyems*) を供える。司祭が酒を飲んだり、肉片入りの獣血を飲んだりすることもある。

(V) 神もしくは悪魔に助力を願い、彼らの眷属を集めるよう要請する。

(VI) 依頼したい仕事の内容を伝える。(たとえば病氣平癒、富の増加、敵の殺害など。)

(VII) 香を焚き、神や悪魔の力を称える。

(VIII) 神を招請した場合にはスレッドクロスを保存。悪魔を捕えた場合には破壊する。

以上のとおりであるが、儀式の詳細、スレッドクロスの各部の名称などについては、今後更に調査していく予定である。

1 *Räkpa dgra ndos kyi cho ga, Orgyan padma mdzad pa bzugs so.*

2 *Martin Brauen, Feste in Ladakh, Graz 1980.*

(大正大学大学院)